論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（ 心理学 ）	氏名	奥田　博子
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達に関する研究
―― 絵画表現を行う芸術家の事例研究 ――

論文審査担当者

主　　査　　教授　　岡本 祐子
審査委員　　教授　　中條 和光
審査委員　　教授　　石田　弓

〔論文審査の要旨〕

本論文は，全盲の 60 代と 70 代になる男性芸術家２名を対象に，20 年にわたる面接調査と発表された作品等の多様な資料分析をもとに，視覚障害をもちながら絵画表現を行うという二律背反性を抱えた芸術家のアイデンティティ危機と発達を論じたものである。

本論文は，以下のように構成されている。

第 1 章「本研究の背景と目的」では，第 1 節において，視覚障害のある芸術家のアイデンティティに関する研究の動向と展望，第 2 節において，事例研究による個人史研究の動向とライフヒストリー分析の臨床的意義と研究方法について述べた。これらを踏まえて第 3 節では，視覚障害のある芸術家のライフヒストリーに焦点を当て，心理的プロセスから捉えられる芸術家アイデンティティ形成の文脈，危機の特質とアイデンティティの発達・成熟のプロセスを明らかにするという本研究の目的を述べた。

第 2 章「事例研究」は，光島貴之氏とエム ナマエ氏という 2 名の全盲の芸術家の事例分析である。方法は，面接調査および発表された資料をカテゴリー生成法により分析した。なお本論文の公表は，対象者本人の承諾を得ている。

第 1 節 「先天性視覚障害があり早期失明した芸術家のライフヒストリー研究（光島貴之）」（研究 1）では，光島貴之氏(1954 年生まれ，10 歳頃，両眼を失明。鍼灸師として治療院を営む傍ら創作活動を行う)の心理的体験過程を主軸にライフヒストリーを描写し，視覚障害のある芸術家としてのアイデンティティ発達のプロセスを分析した。分析の結果，語りと表現の文書セグメント総数 232 個を 53 個の下位カテゴリーに分類し，最終的に，26 個の上位カテゴリーに集約した。これらは，7 つの段階からなる視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達プロセスとしてまとめられた。つまり，①幼児期・児童期における見えにくさの体験の時期，②青年期の内的世界における「見えないこと」への探求の時期，③中年期における「見えないこと」への対峙と表現の始まりの時期，④中年期における自己表現への取り組みと自己洞察の時期，⑤中年期後半の「触覚絵画」制作と「見えない文化」を担い多忙を極める時期，⑥中年期から高齢期への移行期における芸術家としての移行期，⑦高齢期に移行しつつ「見えない世界」と「見える世界」との境界線上を歩くという自覚を持つ時期である。光島は，「視覚障害の世界」と「晴眼の世界」の双方の世界に常に接触しながら生きてきた。一般的なライフサイクル上での危機と，視覚障害のある芸術家の危機の二重構造の中で生き，双方での心理的危機が芸術家

アイデンティティの発達に影響を与えていた。

第2節「中年期中途失明の芸術家のライフヒストリー研究（エム ナマエ)」(研究2）では，エム ナマエ氏（ペンネーム,1948 年生まれ。2019 年に心不全にて逝去）を対象に，中年期に失明した画家が全盲の画家として復活する人生の物語に焦点を当て,そのアイデンティティ危機と発達のプロセスを分析した。分析の結果，語りと表現の文書セグメント総数 281 個を,52 個の下位カテゴリーに分類し,最終的に 29 個の上位カテゴリーに集約した。これらは，7 つの段階からなる視覚障害のある芸術家のアイデンティティ発達のプロセスとしてまとめられた。つまり，①幼児期・児童期の人間形成の時期,②青年期における画家としての出発と人生の旅を意識する時期，③中年期における糖尿病による失明宣告の時期,④絵を描かないで過ごした「空白の 4 年間」を生き抜く時期,⑤中年期後半の全盲の画家として復活する時期，⑥高齢期への移行期における親しい者との死別経験が始まる時期,⑦「エム ナマエ」を生きる高齢期である。彼の生涯を概観すると,7 つの全ての時期において,象徴的,現実的な「死」の観念がエッセイ等の言語表現や絵画作品に現れ,心理的影響を与えていた。糖尿病による失明は,象徴的な「死」と現実の「死」へ直面せざるを得ない状況を生じさせ,晴眼の画家としてのアイデンティティの崩壊を招いた。このことによって,表現者として生き抜くというアイデンティティが明確化された。

第3節「事例の比較分析」では，両氏のアイデンティティ危機と発達について比較分析を行った結果，以下の点が示唆された。①現実的および象徴的な「死」への直面によってアイデンティティは明確化され，極限での「努力」は，視覚を使用しないで描くパラドックス的な表現力を生み出した。②失明という受動的な負の体験であっても，他者から庇護される存在から社会的価値のある作品を表現する能動的体験となり,社会へと発信することが可能となった。③失明や死に直面することによって,アイデンティティが問い直され，失明によって「作品を他者のミラーリングによって見ることが可能」となるパラドキシカルな方策で創造性が引き出された。④人生において自分の本質的信念を貫き通すこと(本研究の 2 事例においては，失明しても絵画表現を続けること)は,アイデンティティの独自性を高め,その独自性を維持していくための命の限りの「努力」によってアイデンティティは発達することが示された。

第3章「本研究の成果と今後の課題」では，第1節において本研究の成果を，第2節において本研究の限界と今後の課題を述べた。

本論文は，次の2点で高く評価することができる。

1. 視覚障害がありながら絵画表現を行うという一般的には相容れない「危機」を生きる芸術家の生涯の事例分析により，アイデンティティ発達における「危機」の意味とプロセスを明確にしたこと。
2. 「危機」の特質とそれを超えていく体験過程を分析することにより，ライフサイクルにおける危機を契機とした循環的発達のモデルを提示したこと。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和2年2月4日